今回、ニュージーランド、韓国を視察するに当たり、自身がまず念頭に置いたことは、昨今、国内でマスコミが TPP の問題を盛んに報道していることを受け、農産物の輸出大国であるニュージーランドと現状では国内消費がほとんどである日本の農業との違いを、営農スタイル、栽培方法や販売方法、流通の仕組みなど、さまざまな観点から探っていきたいということでした。

しかし、ニュージーランドに着いてまず最初に驚かされたのは、その景観の素晴らしさでした。ニュージーランドは、年間 260 万人以上の旅行者が訪れる観光立国でもあるそうで、自然はもちろんのこと、建築物も地域での統一感があり、どこを見渡しても落ち着いた雰囲気が漂っている素晴らしい国だと感じました。一部の高級住宅街では、地域の電柱をなくするために住民自らがお金を出し合い、電線を地下に埋設する工事を行ったそうで、そういったエピソードからも国民の景観維持に対する意識の高さが伺えました。

また現地のガイドさんいわく、この国の人は日本人のように、1 日中休みなく働いたり休日返上で仕事をするといったことはほぼなく、決められた仕事さえこなせば終業時間前であろうとも帰宅することが許されているそうです。そういった国民性もあり、余暇を有意義に使うための新しい遊びを考えるのは非常に上手だそうで、バンジージャンプをはじめとする、大自然を相手にした観光客向けのアクティビティはすごく充実している国だとおっしゃっていました。

観光客を楽しませる前に、自分たちが楽しめる物を創造するといった考えは、観光という観点から学ぶべきポイントであるように感じました。

そして、そういった国民性も予備知識として入れた後に農業視察を行ったわけですが、まず第一に今回の視察の柱である ENZA Fruits のリンゴ園を見せてもらいました。

一目見て日本のリンゴ園とまったく違うのは、園地の 100 %がわい化園であるということです。これはニュージーランドの気候が、雪は降っても積もることがほとんどないため、雪害ということをまったく考えなくても良いことから、省力栽培をする上では必須であることのようでした。そして、その栽培面積も日本とはまったく違い、数十 ha 単位で行っているそうで、完全に質よりも量という経営スタイルでした。

そういった経営スタイルであるが故に、栽培管理の上では、面積当たりの労働時間や個々の果実に費やす手間といったものは日本のリンゴ栽培とは掛け離れており、栽培の手間をいかに減らすか、どうすれば効率的に作業することができるか、といったことを主眼に置いた栽培を行っているように感じました。

その果実品質においては、食味は別としても、見た目に関しては日本の物の方が数段上で、これは韓国のスーパーマーケットでも感じたことですが、やはり果実の外観としては日本のリンゴが世界一であるように思いました。

またこのリンゴご園では、収穫したリンゴのうち、着色や果実の大きさなどの外観が一定のレベルに達していて、特に優れている物を輸出用にしているそうで、その規格に達していない物をスーパーマーケットなどの国内消費用に販売しているとのことでした。

しかし、最終的に消費者が求める物は、その味であることに変わりはなく、その上、ニュージーランドの消費者はできる限りオーガニック栽培に近い物を求めるそうで、栽培者

としてもそのニーズに応えるべく、できる限りの減農薬や化学肥料の不使用、除草剤散布を控えるように努力しているとのことでした。

こういった消費者ニーズに関しては、日本においても昨今、食の安全や安心といった物が求められてきており、作業の省力化や減農薬、減化学肥料といったことは、日本においても農産物の生産コスト削減を狙う意味から、今後も積極的に取り組むべき課題であると思いました。

自分としては専門外なのですが、今回の視察で最も驚いたのは、ハウス栽培のレベルの高さでした。今回の視察ではパプリカとトマトのハウス栽培を見せてもらったのですが、ニュージーランドは積雪がほとんどないことから、ハウスの倒壊を心配せずに大規模栽培を行っていました。

トマトハウスに関しては、1 つのガラスハウスが 4ha もあるそうで、向こう側が見えないほどの規模で栽培を行っており、その管理もかなりの部分がコンピューターで自動化されていました。

どちらのハウスでも、かん水と同時に肥料分の供給も自動的に行えるシステムを導入していて、それだけでも驚きなのですが、さらにそこで使われた水も地中で回収し、リサイクルされているとのことで、これには驚きを通り越してあぜんとさせられました。これにはきちんとした理由もあり、植物に与えた肥料分入りの水も 100 %植物に吸収されるわけではなく、ただ土壌に捨てていたのでは肥料分によって土壌汚染が進んでしまうため、回収して成分を解析し、足りない分の肥料を再度追加してかん水チューブに戻してやる方が、結果としてコスト削減に繋がるとのことでした。これらのシステムを見せられると、もはや単なるハウス栽培というよりも植物工場といった方が適切なのではないかと思わされ、最新の農業システムのレベルの高さには、ただただ圧倒されました。

同じく視察に参加した会員の中にもトマト栽培を行っている人がいるのですが、この栽培方法には驚いていたようで、これらを完全にまねすることはなかなか難しいと言っていましたが、いくつかのポイントでは自らの栽培に取り入れてみたいと思うところがあったようで、意義のある視察になったと思います。

水のリサイクルを行っている点からも分かるように、ニュージーランドの農業者はリサイクル意識も高いことが分かりました。普通であれば捨てたり消却処分してしまうような植物残渣も、きちんと回収して堆肥化し、それを肥料原料として販売するなど、可能な限りリサイクル利用しているとのことでした。

この様な取り組みは、日本のリンゴ栽培でも近年取り入れられていて、剪定枝をチップ化し堆肥として再利用している園地も、まだまだ一部ではありますが見受けるようになっています。

これらの取り組みは環境保全型農業や循環型農業と呼ばれ、日本の農林水産省でも全国的な普及を目指しているそうで、エコファーマーなどの名称で近年多くの農業者が耳にしているものと思われますが、これからの若い農業者は特に意識的に行うことが求められて

いると感じますし、このような取り組みを行わない限り、永続的な農業生産は不可能であるように自分自身も思っています。

今回、ニュージーランドのいくつかの園地を視察してみて総合的に感じたことは、日本の消費者が農産物に求める品質は、世界的に見ても非常に高いレベルにあり、そういった消費者のニーズが、日本の農産物栽培技術を発展させてきたのだろうとも思われます。そう考えると、仮に日本が世界を市場として農産物を売っていこうとした場合、大量消費される穀物類に関しては絶対的な農地面積の違いがあるので別としても、船便などの輸送に耐え、ある程度の保存性を有する高品質果実であれば、日本の農産物も世界で戦える可能性はあるのではないかと思います。

これからの日本、そして世界の農産物の生産と消費は、この先どういった方向へ向かうのか分かりませんが、今回初めて海外の農業というものを目の当たりにして、ニュージーランドで行われている、大規模農場による大量生産というスタイルを日本の青森県でまねするのは無理があるように思います。むしろ高いレベルにある現状の農産物の品質を維持し、より一層向上させることこそが、日本の農業を守ることのように感じた今回の視察研修でした。